

帝都モノガタリ

『白い家』

本シナリオの内容は虚構である。

現実のいかなる人物、団体、その他のものと一切の関係はない。

本シナリオでは大正という時代、文化を扱っている為、現代において差別的な表現となるものが含まれていることがあるが、差別の肯定、助長する意図は決してない。

目次

はじめに	- 3 -
キーパー向け情報	- 3 -
シナリオの概要	- 3 -
シナリオの背景情報	- 4 -
井戸と発端	- 4 -
平取家	- 4 -
戸川家	- 4 -
蘆田家	- 4 -
新興宗教『救迷白光教』	- 4 -
呪文『迷宮を形成する』	- 5 -
もう一つの探索者グループ	- 5 -
登場人物(NPC)	- 5 -
もう一つの探索者グループ	- 5 -
大田隼人、探偵、犠牲者	- 5 -
中桐啓司、雑誌編集者、犠牲者	- 5 -
片山徳、華族、犠牲者ではない	- 5 -
牧野香山、医者、犠牲者	- 6 -
救迷白光教の関係者	- 6 -
蘆田晃白、教祖、アイホートの使徒	- 6 -
蘆田麻里、晃白の母親、巣鴨病院の患者	- 6 -
蘆田親子、契約者	- 7 -
プレイの準備	- 7 -
1:導入部：嵐の前	- 7 -
1-1：中桐よりの連絡	- 7 -
1-2：日比谷公園、野外音楽堂にて	- 7 -
1-3：中桐の手帳	- 9 -
2:牧野の治療院にて	- 9 -
2-1:牧野の治療院	- 9 -
2-2:大田の容態	- 9 -
2-3:大田の話、救迷白光教について	- 10 -
2-4:大田のその後	- 10 -
3:大田の事務所	- 11 -
4:待瀬村の資料	- 11 -
5:新興宗教『救迷白光教』	- 12 -
5-1:救迷白光教の調査	- 13 -
5-2:蘆田晃白の奇跡	- 14 -
5-3:救迷白光教の教典	- 14 -
6:片山の自宅兼事務所	- 15 -
7:怪想社	- 15 -
8:深川の事件	- 15 -

8-1:深川、堀江某の事件	- 15 -
8-2:根岸病院	- 15 -
9:巣鴨病院、蘆田麻里	- 16 -
10:待瀬村	- 17 -
10-1:待瀬村の白い家	- 17 -
10-2:平取家の伝承	- 17 -
10-3:戸川家の噂	- 18 -
10-4:蘆田家の話	- 18 -
11:救迷白光教	- 18 -
11-1:教団を訪ねる	- 20 -
11-2:牧野との面会	- 21 -
11-3:普通の信者	- 21 -
11-4:白い信者達	- 22 -
11-5:光母、蘆田麻里	- 22 -
11-6:揺籃の間	- 22 -
11-7:蘆田晃白の私室	- 23 -
11-8:迷宮と井戸	- 23 -
11-9:秘儀参入	- 23 -
12:迷宮	- 24 -
12-1:迷宮の探索	- 24 -
12-2:平取屋敷の跡	- 25 -
12-3:牧野の死体	- 25 -
12-4:迷宮で起こる出来事	- 26 -
蘆田旭夫、次郎の白骨死体を発見する	- 26 -
その他の信者の白骨死体を発見する	- 26 -
アイホートの雛が這いあがってくる	- 26 -
12-5:迷宮を脱出する	- 26 -
13:『奥の間』、井戸	- 27 -
13-1:蘆田晃白を攻撃する	- 27 -
13-2:『雛を取り除く』を蘆田晃白に試す	- 27 -
13-3:救迷白光教の紋章を破壊する	- 28 -
13-4:井戸を崩す	- 28 -
13-5:アイホートを待つ	- 28 -
14:結末	- 29 -
14-1:浄化される場所	- 29 -
14-2:不浄なる場所は滅びず	- 29 -
14-3:あなたの隣の白い人	- 29 -
14-4:大田のその後	- 29 -
15:正気度の報酬	- 29 -
参考資料、その他	- 31 -
あとがき	- 31 -
奥付	- 31 -

『白い家』

the Pale House

かつてその家に住んでいた魔女は、ある時悲鳴をあげながら外へと走り出てきて、その身体中に群がった何かをかきむしりながら近くの木立の中に消えていったのだという。

—— ラムジー・キャンベル『Before the Storm』より

はじめに

本シナリオは『Call of Cthulhu 新クトゥルフ神話 TRPG』向けである。いわゆる7版向けだが、シナリオの重大な情報が旧版(6版)に存在する為、キーパーには旧版ルールブックと、マレウス・モンストロルムも必要だ。

シナリオを旧版でプレイする場合は、適宜、コンバート、読み替えを行うこと。

罫線(一・一)で囲まれた部分はプレイヤーに読み上げる部分である。そのままでもよいし、キーパーの好きなように読み替えても構わない。

正気度ロールについて、1/1D4のような表記を行う。これは、ロールに成功した場合は1点、失敗した場合は1D4点の正気度を喪失することを表している。

シナリオの便宜上、各場面に番号を振っているが、時系列ではないので注意すること。

キーパー向け情報

シナリオの概要など、キーパーが事前に読む内容である。

アイホートについては、ルールブック P.307 を参照。その雛も同様である。

アイホートの後裔については、マレウス・モンストロルム P.13 を参照。新クトゥルフ神話 TRPG へのコンバートが必要である。

シナリオは大正8年以降、震災前の帝都を舞台としていることを想定している。

それ以前、以降でプレイする場合、キーパーは適宜、シナリオ中の年代や帝都の様子を変更すること。

シナリオの概要

帝都で怪しい噂のある新興宗教『救迷白光教』の教祖、蘆田晃白は**アイホートの使徒**である。

帝都の外れの待瀬村にある教団施設には、アイホートの迷宮に通じる入り口が開いている。教団はこの迷宮へ信者を送り込み、アイホートの雛を植え付けさせるか、アイホートの後裔として教団の都合の良い存在に変えている。

救迷白光教の調査をしていたという中桐啓司から、探索者達は助けを求められる。しかし、待ち合わせの日比谷公園で中桐は奇怪な死を遂げる。

探索者達は彼と一緒に教団を探索していたという、大田隼人、牧野香山の行方を探すとともに、不審な救迷白光教の探索を始める。

大田は中桐と同じ探索者グループの一人、片桐徳によって保護されており、牧野の治療院へ運び込まれていたが、治療院の主である牧野は救迷白光教に捕らえられたままだと言う。

探索者達は牧野の救出と怪しさを増す救迷白光教の探索を進め、帝都で勢力を伸ばし、やはり不審な事件を起こしていることを突き止める。

待瀬村にある教団の本部へと探索者達は潜入するも、そこにはアイホートの後裔となった牧野や、教祖の蘆田晃白が待ち構えていた。

探索者は教団がアイホートの雛を効率よく返す為のものであることを知る。蘆田晃白が神から授かった呪文、『迷宮を形成する』によってその棲み処である迷宮と繋がった教団の施設から、信者達をそこへ送り込んでいるのだ。

迷宮に送り込まれた探索者達は、アイホートと蘆田晃白に対峙することになる。

シナリオの背景情報

シナリオの背景になる情報。直接関係ない部分もあるが、シーケンスの理解等のため一読して欲しい。

井戸と発端

待瀬村にある救迷白光教施設の内部には井戸がある。これはアイホートの潜むブリヂェスターの地下の迷宮への『門』としての機能を持つ。

それはかつての平取の屋敷の裏にあったもので、江戸初期に流れて来た隠れキリシタンを装ったアイホートを信奉する邪教徒によって『門』となり、平取の家は邪宗に染まってしまった。

以降、平取の屋敷にはアイホートの契約者が出て、密かにこの井戸に生贄を投げ落としていた。

アイホートにとってこの契約者はあまり魅力的では無かった。井戸に投げ落とされた犠牲者はその衝撃ですでに死亡していることがほとんどで、雛を植え付けることができず、その餌以上にはならなかったからだ。

平取家

待瀬村の名主であった平取家は、旅人や罪人、ときには村人をどこからかどわかって井戸に投げ入れていたが、生贄はほとんど死んでしまっており、アイホートの満足には程遠かった為に、平取家への見返りもそれほどではなかった。

しかし、ときに熱心な信奉者が現れ、中には契約者となる者も出て乱心者などとして事件を引き起こしていた。

明治維新に前後しておそらく最も熱心な契約者が平取の家に現れる。あまりに短い期間に旅人や近隣の住人といった多くの人を井戸に投げ入れた為、不安に駆られた村人たちによって平取の家は潰されてしまった。

戸川家

平取家が去った後、明治の中期にその屋敷を再建して移り住んだのは戸川家だった。

ごく普通の農家だったが、不幸にして戸川は井戸に降りてしまい、アイホートと遭遇してしまった。

契約者となった戸川は妻と子供を井戸に送り込んだが妻の抵抗にあい、アイホートの怒りを買って息子ともども殺されてしまう。かろうじて生き残った妻も精神に異常を来して、脳病院で死んでしまった。

蘆田家

戸川の一家が全滅して無人となった屋敷は、明治末期に蘆田家が入った。

戸川と同じく、蘆田旭夫、次郎は井戸に降りてアイホートの契約者となる。この二人は平取家の秘密を知っており、積極的にアイホートと契約した(彼らが予想したようなものとは異なったが)。

またも村人を井戸に投げ落としていたが、犠牲者が見つかりにくかったこともあり、結局、次郎の妻の麻里と息子の晃を井戸に投げ入れた。

妻の麻里は大怪我を負い、アイホートに遭遇しながらも運が良かったのか、狂人の限界を超えた力が発揮されたのか井戸から脱出したが、精神に異常を来して巣鴨病院へ隔離、収容された。

息子の晃はアイホートとの遭遇によって、アイホートの使徒となり井戸から帰ってきた。

彼は井戸に投げ込まれたことで死に瀕するほどの大怪我を負ってはいたが、まだ生きていた。

アイホートは彼の同意を得て雛を植え付けたが、怪我のせいで長くはないことを悟った為、雛たちでその身体を補うようにした。その結果、晃は人間でありながらアイホートの雛たちが失った身体を補うハイブリッドな存在、アイホートの使徒となった。

新興宗教『救迷白光教』

井戸から帰ってきた晃は、晃白を名乗るようになる。

晃白はまず祖母と父親を井戸へ投げ落として始末し、両親をアイホートの後裔として再生した。

その後、アイホートの意思に従い犠牲者を集める為に『救迷白光教』(ぐめいびゃっこうきょう)を開く。

神からの加護を得ているうえに、アイホートの使徒である晃白が偽の奇跡を見せることで、『救迷白光教』は着々と信者を増やしている。

教団の幹部のほとんどはアイホートの後裔であり、信者達をアイホートの質問に対して応じるように洗脳し、迷宮の神のもとへと送り込んでいる。

呪文『迷宮を形成する』

蘆田晃白がアイホートから授けられた呪文である。

この呪文は『門』の呪文のように一定の場所や物に使用することによって、その周辺を迷宮として認識させるようにする。

物理的に迷宮を形成する呪文ではないが、呪文の影響下にある場合は迷宮が物理的なものであるという認識になる。

この呪文はアイホートの用途である蘆田晃白以外に使うことはできない。

もう一つの探索者グループ

帝都の探偵、大田隼人を中心とした医者の中桐啓司、高等遊民の片山徳、雑誌編集者の中桐啓司の4人の探索者グループ。

各自の詳細は、登場人物を参照。

彼らは救迷白光教に親族が入信してしまって帰ってこないという依頼を受けて、教団を調査していた。

内部調査の為に大田、牧野、中桐は信者を装って潜入をしたが発覚、アイホートの待つ迷宮へと送り込まれてしまう。

迷宮で神と遭遇した3人は、その雛を受け入れる契約を行うか質問される。大田と中桐は狂気に陥って受け入れてしまい、正気だった中桐は拒否したことで殺害され、アイホートの後裔と置き換わった。

雛を植え付けられた後、迷宮から放り出された大田と中桐は狂気の副作用と植え付けられた雛を通してアイホートに操られることにより、雛を受け入れた事実や相棒の牧野の死を忘却してしまった。

迷宮を出て正気に戻った大田と中桐は教団の手を逃れ、探索者達に助けを求めることにした(彼らは逃れたように思っているが、実はアイホートと蘆田晃白が新たな犠牲者を呼び込むために逃したのだ)。

登場人物(NPC)

シナリオの登場人物(NPC)を紹介する。キーパーはここに記載されているデータを好きなように変更しても構わないし、適宜増減させて問題ない。

もう一つの探索者グループ

探偵の大田を中心とした探索者のグループである。

プレイヤーの探索者達と同業者のような立場であり、何度か助けたり助けられたりしたことがあるとするとよいだろう。

大田隼人、探偵、犠牲者

おおた・はやと、有能な探偵だが、運が悪い。迷宮で『アイホート』に遭遇し、正気を失って雛を受け入れてしまった。

彼はすでに『アイホート』から送られる幻覚や、雛に蝕まれることで見る白昼夢に苛まれており、牧野を見捨てた罪悪感からその形をしている『アイホートの後裔』を助けることに固執する。

※大田は現在治療中であり、まともに技能等が使える状態ではない為、能力値等は省略する。

大田がこのシナリオを生き延びた場合、キーパーで適宜設定してもらいたい。

中桐啓司、雑誌編集者、犠牲者

なかぎり・けいじ、怪想社の若手編集者で、自身も小説や記事を書くなどして活躍しているが、運が悪い。

先走る性格で、迷宮に放り込まれる原因を作り、『アイホート』に遭遇し、大田と同じく雛を受け入れてしまった。

大田よりも早く雛が孵ってしまう為、シナリオの開始時に死亡する。

※中桐はシナリオの開始時に死亡する為、能力値等は省略する。

片山徳、華族、犠牲者ではない

かたやま・とく、大田の探索者グループの信用担当であり、財布である。

華族、片山家の未亡人で実質的に当主の立場にある。夫を神話的事件で亡くしており、自身も探索者として活動するとともに、幅広く援助を与えている。

今回の探索には直接参加せず、側面支援を行っていた。大田と中桐が逃げ出してきたため、牧野の治療院に匿っている。

一人では動きづらいところへ探索者達が訪ねてくるので、それを頼って牧野を助け出そうと考えている。

STR 60 CON 65 SIZE 60 DEX 55 INT 75
APP 70 POW 75 EDU 80 正気度 66 耐久力 13
DB:+0 ビルド:0 移動:8
近接戦闘(格闘)25%、ダメージ 1D3+DB

回避 27%

技能：威圧 76%、医学 60%、芸術(古物) 70%、経理 70%、心理学 55%、説得 70%、ほかの言語(英語) 60%、ほかの言語(ドイツ語) 50%、図書館 65%、魅惑 60%、信用 80%、

牧野香山、医者、犠牲者

まきの・こうざん、腕の良い医者であり、検死等の法医学的な経験、知識も豊富だが、運が悪い。

迷宮でアイホートの遭遇し、正気を保っていた為に契約を拒んで殺されてしまった。

彼の死体は迷宮に残されているが、蘆田晃白とその教団によって『アイホートの後裔』が作成された。

※牧野はシナリオの開始時にはすでに死亡し、アイホートの後裔と入れ替わっているため、能力値等は省略する。

救迷白光教の関係者

救迷白光教の関係者だが、アイホートの後裔と入れ替わっているか、死亡している。

蘆田晃白、教祖、アイホートの使徒

あしだ・こうはく、新興宗教『救迷白光教』の教祖である。

アイホートの井戸へ落ちて死に瀕するも、雛を植え付けられることで生き延び、孵った雛が失われた

身体の一部を補うアイホートの使徒となっている。

写真記憶の持ち主であり、教団に居るアイホートの後裔の容姿は彼の記憶に基づいて作られている。

雛によってアイホートの意思を直接受けることができ、それによって迷宮を作り出す呪文『迷宮を形成する』を習得している。

彼の目的はアイホートの迷宮へ定期的に生贄を送り込むことである。

そのため怪しまれないように新興宗教を興し、居なくなってもすぐに気づかれないような弱者を保護し、洗脳してアイホートの元へ送り込んでいる(アイホートの儀礼として、かの神に遭遇した際に雛を受け入れるか否かを問われるが、これを受け入れるように仕込んでいるのだ)。

蘆田晃白、アイホートの使徒

アイホートの使徒は、人間とアイホートの雛が融合した個体であり、アイホートの後裔とは異なる。

後裔は雛達が人間を擬態しており、完全に雛で出来た存在だが、使徒は人間の部分と雛の部分が入り交じっており、人間としての知能や知性、知識を保ったまま後裔と同じ能力を振るう。

STR 70 CON 80 SIZE 35 DEX 60 INT 90
APP 50 POW 70 EDU 50 正気度 N/A 耐久力 11
MP 14

DB:+0 ビルド:0 移動:9

近接戦闘(格闘) 60%、ダメージ 1D6+DB(ナイフを使用)

回避 30%

装甲：なし。ただし、物理的なダメージは最小限のダメージしか与えない。

呪文：アイホートとの接触、手足の萎縮、破壊、迷宮を形成する

正気度喪失：通常の姿でいる蘆田晃白を見ても正気度の喪失はない。

耐久力を0にして、アイホートの雛で出来た身体が崩壊する様を目撃した場合、1/1D8の正気度を喪失する。

蘆田麻里、晃白の母親、巣鴨病院の患者

あしだ・まり、巣鴨病院の患者である。

晃白よりも前に井戸へ投げ入れられた。アイホートに遭遇したが逃亡に成功し、井戸より帰還した。

狂気に囚われている為、巢鴨病院へ入院させられているが、彼女を模したアイホートの後裔が教団に居る為、身元不明の患者となっている。

正気ではない為、まともな情報は得られないが、教団幹部の母親が偽物であることが分かる。

この偽物の蘆田麻里は教団の最高幹部の一人であり、『光母さま(こうぼさま)』と呼ばれている。

※蘆田麻里について、本物は技能等が使えるような状態ではない為、能力値等は省略する。

偽物はアイホートの後裔である為、同じく能力値等は省略する。

蘆田親子、契約者

アイホートの契約者となった蘆田晃白の祖父、蘆田旭夫(あした・あきお)と、父の蘆田次郎(あした・じろう)。

二人は待瀬村の平取屋敷の噂を聞きつけ、井戸を調査した。

彼らは何か秘密が、金儲けの種になるものが見つかるものと思っていたが、アイホートと遭遇し、自身の間違いに気づいたときはすでに遅かった。

アイホートの契約者となった彼らは、積極的に生贄を探したが人もまばらな地域ではそれも難しかった為、肉親を井戸に投げ入れることになる。

次郎の息子の晃が井戸より帰ってきた後、二人は迷宮へ再び送り込まれ、そこで雛が孵って二度と地上に姿を現すことは無かった。

※蘆田親子もアイホートの後裔と入れ替わっているため、能力値等は省略する。

プレイの準備

プレイヤーが探索者を作成する、あるいは探索者のバックストーリーを編集する際に、シナリオの冒頭を伝えておくよいだらう。

大正後期、震災前の帝都で、雑誌編集者の中桐から助けを求められる。彼の要請に従って、探索者達はある新興宗教の探索を行う。

探索者達は中桐、片山、牧野の探索者グループと同業者的な立場であり、協力関係にあるとし

て関係などを構築するとよいだらう。ここでは不必要に細部を盛り上げないように気を付けること。

キーパーへ：もう一つの探索者グループについては、探索者達との関係を設定することで、探索の動機を補強する。

個人同士の関係でもよいし、同業として協力関係などと大体決めればよい。

牧野は表向き小さな治療院を営む医者だが、裏では神話的事件が絡む公にできない患者の治療にあたっていたので、これに世話になったことがあるなどとするのもよいだらう。

1:導入部：嵐の前

導入で探索者の所在がばらばらの可能性がある。探索者が全員揃っている場面から始まることにして、多少強引でも、日比谷公園に全員で赴くようにすること。

1-1：中桐よりの連絡

台風が接近している気配のある帝都で、探索者達は知り合いの雑誌記者、中桐啓司から電話を受ける。探索者の家に電話が無い場合は、緊急の連絡先から回ってくる。

彼は日比谷公園の野外音楽堂の辺りで待っていると告げる。

閉園に近い時間のうえに、風雨が強まる中で、探索者達は気が進まないかもしれないが、中桐が帝都の外れにある新興宗教の調査を行っていたことや、バックストーリーに絡めて世話になったり、したりしていたことを理由に、音楽堂へ向かわせること。

連絡を受けた探索者は一人になるが、全員に連絡をしてから向かっても構わない。

1-2：日比谷公園、野外音楽堂にて

探索者達が日比谷公園の野外音楽堂に赴く頃には、台風の接近により風雨がひどくなってきている。

暗いうえに、中桐は座り込んでいる為、見つけるには<目星>を成功する必要がある。プッシュロー

ルはできず失敗しても中桐は見つかるが、その場合は時間が掛かり、探索者達は濡れ鼠になってしまう。

探索者が見つけた中桐はぐったりと座り込んでいる。普段の彼はなかなかの伊達男だが、今は見る影も無い。

整っていた髪型は風雨に任せてぼさぼさに乱れており、髭も何日も剃られておらず伸び放題になっている。げっそりと痩せて蒼白な顔色なのは遠目からも分かる。

探索者達が近づいてくるのに気が付くと、中桐はよろよろと立ち上がり近寄りながら叫んだ。

「蛆の家だ…、牧野さんを助けに」

中桐が探索者達にその続きを言おうと口を開いた瞬間、その眼がぐるりと白目をむく。

形容しがたい、呻くような悲鳴を上げながら膝をつき、探索者達の方へと倒れこむ中桐の額から鼻、口と身体を中心に沿って裂け目が広がっていく。そして、そこから小さなボタン程度の大きさの白いものが流れるように溢れ出し、対照的にその身体は空気が抜けていく風船のように萎んでいった。

中桐の凄惨な死に様を目撃した場合、1D3/2D6の正気度を喪失する。

中桐から溢れ出した白い蜘蛛の様な小さな塊の群れは音もなく動き回って、物陰や側溝に逃げ込んで消えていく。風が強いこともあり、一部は風に流れていくのが分かる。

この白いものを探索者が(狂気の発作などで)踏み潰そうとした場合、それらはあっけなく潰れて動かなくなるが、どれだけ踏み潰しても蠢くそいつらを全て殺すことはできない。

キーパーへ：探索者がしつこくアイホートの雛を探し出して殺した場合、シナリオの後半の場面においてアイホートに遭遇したさいに、激怒している神が質問も警告もなしに報復として無慈悲にその探索者を踏み潰してもよい。

探索者が中桐の死体を調べた場合、彼の身体の一部、額、鼻、顎、ヘソを中心とした腹部が大きく裂けており、その身体の一部がほとんど無くなっていることが分かる。その他にも身体の一部に1cm

程度の、つまりあの白い蜘蛛の様なものが通り抜ける大きさの穴が開いていることに気が付く。

十分に恐ろしい光景ではあるが、予想されたことである為、0/1D3の正気度の喪失に留まる。

<医学>に成功した場合、このような症状を示す病気は存在しないことに気が付くが、それ以上のことは分からない(何らかの寄生物が中桐の身体を食い散らかしたのだ、という確信は調べただけで得られる)。

中桐の死体の着衣を調べた場合、それ自体にロールは必要ないが<幸運>を行う。失敗すると、中桐の死体を調べているうちに、例の白い蜘蛛、あるいは蛆の様なものが自分の身体に這いあがってくることに気が付き、1点の正気度を喪失する。

中桐の死体の上着から、水を含んで使えなくなった彼の怪想社の名刺、愛用の手帳と万年筆が、ズボンからは使い込んだ財布が見つかるが、これにはほとんど現金は入っていない。

注意深く上着を観察した場合は、そこに中桐の名前が刺繍されていることに気が付く。

中桐の死体は限りなく奇妙だが、変死体として扱われる為、発見されれば捜査の対象となる。閉園直前の夜の日比谷公園へ入るところを目撃されたり、上着の刺繍から中桐であることが知れ、その交友関係等から警察関係者が探索者に聞き込みに来る可能性はある。

キーパーは警察がこの事件に対して全くの無能であることを示せばよいだろう。探索者達が超自然的なことを説明したり、説得したりしても冷笑を得るだけだ。

キーパーへ：つまり、警察は役に立たないし、何も掴んでいない、ということを探索者達に印象付け

日比谷公園野外音楽堂：現在でも東京都千代田区にある公園で、当時は東京市麹町区。

明治36(1903)年に政府の欧化計画の一環として日本庭園式の公園ではなく、西洋風の公園として開園した。

開園から2年後の明治38年に野外音楽堂(現在の小音楽堂)が開設されている(現在と同じような八角形の建物である)。

野外大音楽堂は大正12(1923)年7月に完成。

て、探索者に司直の手が迫ることはないと分からせること。

キーパーの趣味によってはしつこく付きまとうが役に立たない、たまに捜査の情報を漏らす警察関係者などを出しても構わない。

1-3: 中桐の手帳

強くつかんだのか捻じれていて、雨に濡れて一部インクが滲んでいるが、判読に苦労するほどではない(中桐は達筆ではないが、他人が判読しやすい文字を書く)。

中桐の手帳には、怪想社の関連の連絡先の他、大田、牧野、片山や、探索者達の連絡先、牧野の治療院の連絡先、住所も載っている(探索者が大田や牧野、片山と親しくしていたことにした場合は、元々知っていることにしてもよい)。

関係がありそうなのは、以下の連絡先である。

- ・大田の探偵事務所
- ・牧野の治療院
- ・片山の自宅兼事務所
- ・怪想社の編集部

その他に編集の仕事のメモや、小説のアイデアや記事のメモ書き等の他、過去の探索に関わる内容も記されているが、最近関わっていたという新興宗教『救迷白光教』に関わる記述は見つからず、途中から何ページか破り取られている。最も新しく書かれたと思しきページは、その後に書かれている。

— . — . — . — . — . — . — . — . — . — . — . — . —
あの後から、何かおかしい。身体がむずむずする。
逃げ出したはずだが、その記憶が曖昧だ。
目が覚めた後、身体がひどく汚れている。大田さんも同じだ。
牧野さんはどこだ。
蛆の家だ。まだ、牧野さんはそこに残っている。
助けを求めなければ。
— . — . — . — . — . — . — . — . — . — . — . — . —

2: 牧野の治療院にて

中桐の手帳からか、探索者と大田達との関係から連絡を取った場合、連絡が付くのは牧野の治療院に

いる片山だけである。大田、片山とも牧野の治療院に居るためだ。

2-1: 牧野の治療院

神田区にある牧野の治療院へ探索者達が赴くと、疲れ切った様子の片山が出てくる。

彼女は家庭の事情から今回の探索に直接参加しておらず、後方支援を主に行っていた。

教団から脱出した中桐から連絡を受けて、衰弱した大田と中桐を治療院に運んだが、二人とも姿を消し、大田の方は事務所で発見して治療院に戻したが、中桐はまだ見つかっておらず、探索者が知らせていなければ、彼女は中桐が死んだことも知らない。

片山は牧野が居ないことに加えて、大田の様子から治療院の看護婦たちに近寄らないようにと指示を出し、自身で大田の治療に当たっている。

大田は「神話的な事件絡みの際に使用される」特別治療室へ放り込まれている。

2-2: 大田の容態

片山の案内で特別治療室へ通された探索者が大田を<医学>で診察した場合、心身の激しい衰弱が見られることが分かる。これは失敗しても、片山が同じ所見を口にする(彼女は素人以上の医学の知識がある)。

<心理学>によって片山が何か隠していることに気が付くか、探索者に医者が居る場合、腹部等を触診したときに、皮膚下で蠢くような感触があったと言う。

見た目では分からない何か重大な病の可能性があるが、そういった兆候がみられず、たまたまかもしれないと曖昧な発言をする。

探索者が大田の腹を注意深く観察するか、<医学>に成功している場合、この片山の言葉が真実だと気が付き、1/1D3の正気度を喪失するとともに、大田も中桐と同じような状態になっている可能性が高いと分かる。

大田は熱に浮かされたような状態ではあるが、会話は可能である。

青白い、不健康で憔悴した顔をした大田は、探索

者に気が付くと、何か言われる前に、「俺は、何故こんなところに居るんだ？」と、探索者に不可解そうな表情を見せる。

大田は『救迷白光教』の探索を行っていた記憶がほとんど失われている。これは彼が正気を保つ為に記憶を自ら手放したことで、アイホートとその雛の影響によって『救迷白光教』のことを忘れさせられたのだ。

大田は探索者に牧野や中桐のことを聞かれると、思い出したように彼らと『救迷白光教』の探索を行っていたことを告げる。

キーパーへ：大田の腹部がうごめくのは、アイホートの雛がその体内に巣食っていることを示す為だが、やり過ぎると探索者が大田を開腹手術しようとするかもしれない。

腹を開くとアイホートの雛が溢れ出てくる…、というのは面白いかもしれないが、それをやると大田は死亡するので注意すること。

2-3:大田の話、救迷白光教について

探索者達は大田達の基本的な情報は知っている。キーパーは、彼らについて問われた場合、ロール等行わずに教えること。

直近で彼らが探索を行っていた新興宗教『救迷白光教』の情報は知らない為、大田から聞き出す必要がある。

大田は、聞かれなかったことは語らない。彼はアイホートの意思を受けている為、迷宮へ犠牲者を導くような言動をする。この場面では、無意識の非協力によって、探索者達を罠にかけるようにしている。

- 自分たちは依頼を受けて、荏原郡にある待瀬村に本部を構える新興宗教『救迷白光教』の調査を行っていた。
- 教団に入信した親族と連絡が取れず、可能ならば連れ出して欲しいという依頼だった。
- 教団について外部から調べもしたが、依頼の為に信者を偽って潜入した。
- 牧野、中桐とともに潜入し、片山は外からバックアップだったが、潜入調査が発覚した為、教団から逃亡を図ったが牧野は捕まってしまっ

た。

新興宗教『救迷白光教』について聞いた場合、以下のように語る。

- 教団は広く信者を受け入れており、その中に依頼の人物が居た。その人は、依頼者から逃げ出したようだった。
- 教団には信者が多数おり、同じように逃げ出したり、立場が弱い人間を広く受け入れていると言う。
- 待瀬村にある教団本部はまるで迷宮のようだった。
- 教祖の蘆田晃白は神の使いであり、様々な奇跡を起こしていると言う。斬りつけられても彼の身体から血が流れないのを、自分も見せられている。

大田は教団の詳細については、脱出を図った後ぐらいの記憶が曖昧になっており、それぐらいしか思い出出すことが出来ないと言う。

探索者がしつこく聞くか、<ヒプノーシス>で記憶を取り戻させようとした場合、彼は混乱した様子を見せ、中桐と同じように「蛆の家なんだ！あの白い棲み処に牧野が！」と叫ぶ。この大田の異様な混乱ぶりを目撃した探索者は、0/1の正気度を喪失する。

大田に対して<心理学>を行っても、彼には不審な様子は無い。彼はアイホートのコントロールを受けているが、それは平常の精神状態が移行しているだけで、ある意味では正常なのだ。<精神分析>を行った場合も同様に効果はない。彼が錯乱を始めた場合には、落ち着かせることが出来る。

大田の話の後、片山は家の諸事情と、大田の治療にあたっている為、探索の手伝いは出来ないが、後方支援は出来るので何か必要なものなどあれば言ってくれと言う。

2-4:大田のその後

大田はその後、大人しく牧野の治療院で片山の治療を受ける(あまり意味は無いが)。

時間が経過するにつれ、彼の体内で雛が成長し、食い荒らし始める。

アイホートは契約を受け入れた大田と、その体内の雛たちに接触をして夢引きのような効果を与えており、『グラークの黙示録』にちなんだ幻覚が彼を苛む。

大田を助けるには呪文『雛を取り除く』が必要である(外科的な手術で雛を取り除くことは出来ない)。呪文の詳細は、CoC6 版の P.279 を参照。

この呪文を習得するには、大田が見ている悪夢の元である『グラークの黙示録』のIV巻を読むか、シナリオの後半の迷宮で発見される平取のメモから習得する(アイホート自身から授けてもらう方法もあるが、その見込みはない)。

キーパーの判断によるが、大田の悪夢をよく聞き取ってそれを手掛かりに呪文を学ぶなどしても面白いかもしれない。あるいは、探索者の知り合いに著名なオカルティストが居る場合など、これを示唆することで得られる呪文としてもよいだろう。

呪文は、単純に犠牲者の体内から雛を追い出すだけである。駆逐されるのが遅く、雛が肥えてきている場合、身体を離れることで死亡する場合もある。

キーパーへ：アイホートの雛が巣立つまでの期間は、神格の項目に書かれている期間は非常に長い。しかし、呪文『雛を取り除く』から短い期間で雛が成長すると推察できる為、本シナリオでは呪文『雛を取り除く』に準拠し、短い期間で成長することにする。

3:大田の事務所

無人である為、事務所に電話を掛けても反応はない。

直接出向いた場合は事務所の扉には鍵が掛けられている。先に牧野の治療院で片山に会っている場合は、鍵を貸してもらうことが出来る。

扉、あるいは窓は<鍵開け>で開けることができるが、丈夫な鍵ではないし、窓も普通のガラスである為、破壊は容易である(この場合は<幸運>などで近所住民に気付かれたか決めるとよいだろう)。

大田の事務所の内部へ入ると、床や机、その他の場所にも書類が散乱しており、家探ししたように荒らされていることに気が付く。

窓など(探索者が破って入った場合以外の)破られた痕跡はない。

大田は几帳面な性格ではないが、助手を雇って事件毎に書類を整理し、事務所内は整理を心がけている。そのことは探索者が知っていてもよい。

部屋が荒れているのは、アイホートのコントロールを受けた大田自身が『救迷白光教』の探索の記録を破棄したからである。その後、倒れているところを片山に発見され、牧野の治療院へ連れ戻された。

散乱している書類を調べた場合、<目星>、<隠密>、<追跡>、<図書館>のどれかに成功すれば、荒らされたように見えるが何かを探したというよりも、わざと書類を散乱させたように感じる。そして、最近の調査内容であろう『救迷白光教』の資料が失われていることが分かるが、『待瀬村』と題された手書きの資料を発見する。

『待瀬村』は、『救迷白光教』の本部が置かれている村だ。探索者はこのことを知らなくとも、手書きの気になる資料として発見する。

プッシュロールで失敗した場合、資料を発見すると同時に家探しする探索者達を怪しんだ近隣住民によって通報がなされ、警察が踏み込んでくる。折しも、中桐の変死体が見つかり、彼と関係が深い大田の事務所を家探ししている探索者達は証拠らしい証拠がなくとも、重要参考人扱いとなる。

いかなる抗弁も聞かず、最寄りの警察署へ連行されて拘束されることになり、自白を強要される(探索者は犯人ではないので、時間が無駄に過ぎるだけだ)。

1日無駄にした後、事態を聞きつけた片山の努力によって、探索者達は釈放される。

4:待瀬村の資料

この資料は中桐の手書きのもので、清書前のものである。何らかの資料に挟まっていたか、雑多な資料にまとめられていたが、大田が荒らすことで散乱した書類の中に混じっている。

探索者が中桐の手帳の文字と比べた場合、ロールなしで彼の文字だと分かる(疑り深い探索者が筆跡鑑定などをした場合、完全に同一人物の手によるものだと保証を得られる)。

この資料を読むにはロールは必要ない。時間を掛ければ普通に読める。キーパーが書かれている内容を読み上げるには長いので、ハンドアウトとして提示したほうがよい。

江戸期において、待瀬村は特にこれといった特徴の無い村だったが、名主の平取の家系には乱心者や、新宗教に凝る者が多かったと伝わっている。

江戸中期に平取の息子が乱心し、井戸に村人を投げ落とす事件が多発し、乱心者として指籠入れとした、と記録がある。

犠牲者の把握の為に役人が井戸を浚ったところ、申し立てのあった件数よりも多い死体が出て来たが、かなり古いものが混じっていたという。

井戸から犠牲者が帰ってきた、という怪談が後日に流行る。

井戸に落とされたが死体を発見できなかった犠牲者が、白い姿で村人に目撃されたという。

(中桐のメモ：『井戸に何かある?』)

維新のどさくさに紛れているが、慶応年間(1865年~)から明治3(1870)年にかけて待瀬村近隣の者が行方不明になる事件が発生する。平取の家の者が村人の娘を誘拐しようとしたとして、暴徒と化した村人が平取の家を襲い、私刑にした。

事件後に報告書が作成されたが、捜査や訴訟の前に私刑があったのは明白である。

生き残った平取の家の者は村から去ったが、その後の明治10年にも行方不明事件は報告されている。

明治27(1894)年、近隣の村の戸川がその家を買取り、移り住んだ。それまでは空き家だったようだ。

翌28年、戸川の妻が「巨大な蛆が夫と息子を殺してしまった」、と家から逃げ出してきて訴えた。

近隣の巡査が井戸の周りでばらばらになった戸川の夫と息子を発見する。凶器らしい凶器は発見されなかったが、状況から戸川の妻が起訴される。

戸川の妻は精神に異常を来しており、脳病院へ収容されたが回復せず、そのまま何も語らずに亡くなっている。

明治44(1911)年に売りに出されていた家を蘆田家がい取り、住み始めた。

大正2(1913)年に、当時の蘆田家の当主である旭夫が、井戸に村人を投げ落とす事件が起こる。村の有力者になりつつあった蘆田家のことである為、大事にはならなかった。

(中桐のメモ：『この間にも行方不明者は出ている』)

大正5(1916)年、旭夫の息子の次郎が妻の麻里、息子の晃を同じく井戸に投げ落とす事件が起こる。妻の麻里は大怪我を負うとともに、精神に異常を来し巣鴨病院へ入ったという。

(中桐のメモ：『また井戸だ』 『巣鴨病院に』)

息子の晃は、この事件で神の教えに目覚め、不可思議な力を身に付けたと言い、神の教えに従って『救迷白光教』を開く。

(中桐のメモ：『以降の記録で目を引くものはない。救迷白光教のせいだろう』)

5:新興宗教『救迷白光教』

探索者達も大田から事前に聞いているか、ある程度の認識は持っている為、キーパーは探索者達に以下の一般情報を伝えること。

- 帝都でも最近噂になっている新興宗教。
- 教祖である『蘆田晃白』が奇跡を起こすらしい。

江戸期における乱心者の扱い：江戸期において乱心者、精神に変調を来した者の扱いは以下の通りである(詳細は藩によって異なるので、だいたい)。

- ・ 手鎖(てぐさり)
両手を鎖で縛ったうえ、封印の札を張っておいた。犯罪者にも行われた。
- ・ 指籠入(さしこいれ)
指籠と呼ばれる木造の座敷牢、もしくは小屋に乱心者をに入れて拘束する(籠の名前の通り、かなり狭い)。手鎖と同じく封印を施した。犯罪者にも行われた。
- ・ 入牢
文字通り、牢に入れられる。犯罪者と同様の扱いで、治安を乱す可能性が高い場合や、名主などの責任を請け負う人間から特に要請された場合のみとなる。

江戸期でも、精神に異常を来した者達の責任能力を勘案して、処罰の減免は行われた。農民などではその監督責任を負うのは名主などの農民を管理する立場の者となり、何かあった場合は連帯責任を負わされる為、意外に対応は早かった。

江戸期から戦前まで、乱心者の扱いについては私宅監置の座敷牢のイメージが強いが、それを設置できるのは富裕な層に限られる。多くは衛生状態の悪い暗い狭い部屋や、さらに狭い小屋や、拘束に近い状態で籠のような場所に押し込められていることも少なくなかった(明治期以降は、さすがに籠に押し込めるようなことは減ったようではあるが、呉秀三の調査の中で犬小屋のような場所や、土間の隅の籠のような場所、床下に押し込めていたという記述も見られる)。

5-1:救迷白光教の調査

救迷白光教を調べる場合、図書館の資料や過去の新聞の他、オカルト関連の情報源か、警察関係者や、特高関係者へ聞き込みを行うこともできる(当時、新興宗教は類似宗教と呼ばれ、思想の監視の対象だった。その為、それらの管轄は警保局だったのだ)。

中桐の連絡先の一つである、『怪想社』でも彼がある程度の連絡を入れていたこともある為、同じように情報が得られる。

探索者のコミュニケーション手段や聞き込み、調査に行く先によって、適宜ロールを行う。簡単な内容である為、探索者の行動が適切だと判断したならば、有利の修正を与える。

ロールに成功した場合に得られる情報は以下の通り。キーパーはシナリオの進行度合い等によって、伝える情報を加減するとよいだろう。

- 東京市の外れの待瀬村に、本部施設がある。
- 迷いから救う白い光の神に信奉する団体。
- 蜘蛛のような形をした迷路のような紋章を掲げている。曰く、「人と云うものは、蜘蛛の巣に絡まったり、迷路に迷ったりしているようなものだ。それを救うのが我々の使命である」と。

- 信者の幅は広く、様々な身分、職業の人間が居る。中には外国へ移り住んで教をを広めている者も居るといふ。
- 教祖は蘆田晃白という少年である。蘆田の家は待瀬村へ越してきた豪農のようなものだった。
- 蘆田少年は数年前に井戸に落ち、瀕死の重傷を負ったが、それ以来不思議な力が身に付いたと言ふ。
- 母親の方が同じく井戸に落ちたが、大怪我をしただけでなく気が触れて巣鴨病院の世話になっているらしい。

資料ではなく人に当たっている場合、ハード以上で成功すると以下の情報を得られる。

- 深川辺りに住んでいた堀江という女が、家庭内での虐待に耐えかねて入信した。出家の準備の為に家に戻ったところ夫に拘まり、殺されてしまったという。夫が犯人とされているが、精神に異常を来して根岸病院で療養している。
- 救迷白光教の教義は理解し難いが、行くあてのない弱い立場の人間を保護しているという。

新興宗教について：戦前では文部省宗教局が仏教、キリスト教、神道の公認宗教を管轄し、新興宗教は内務省警保局(警察部門を担当、現在の警察庁に近い)が管轄しており監視、取り締まりの対象だった。戦前の宗教団体法では、公認の宗教以外は認められていなかったが、宗教結社として届け出るようになっていた。この為、届出を出して宗教結社となったり、公認されている宗教団体に所属したりして活動したが、非公認のまま類似宗教団体である場合もあった。

また、明治期において学校などの教育の場で宗教を持ち出すのは明確に禁止されていた(明治 32(1899)年の『「一般ノ教育ヲ宗教 以外ニ特立セシムル件』)。新興宗教と言う言葉自体は戦後のものであり、当時としてはそういった新しい宗教を区別するような言葉は無かったとされている。大正 8(1919)年に、文部省宗教局が各県に「宗教及之ニ類スル行為ヲ為ス者ノ行動通報方ノ件」を出したことによって、「類似宗教」という言葉が使われるようになったと言われている。

5-2: 蘆田晃白の奇跡

探索者が特に蘆田晃白の奇跡に興味を示した場合、追加で下記の情報を伝える。この時に追加でロールは必要ない。

- 出家した信者の親族に刀で斬りつけられたが、血も流れなかった。親族は奇跡を目の当たりにして、親族と同じく信者となったという。
- 1 か月の間、飲まず食わずのまま過ごしたという。
- 同時に 2 か所の場所に現れて、同じ説法をしたという。
- 千里眼を称して海外の出来事を語り、後日それが新聞に載るなどして分かったという。
- 一度留置所へ入れられたが、いつの間にか教団の施設に戻っており、それが何度も繰り返されるので警察も諦めたという。

蘆田晃白は『アイホートの使徒』である。身体の大部分はアイホートの雛で出来ている為、刀で斬られたりしても血が流れないうえに、最低限のダメージしか受けない。

彼の身体を形作る雛達はその身体を離れてどこかで食事をする為、本人は飲まず食わずでも問題ない(彼自身に必要な栄養も雛たちから与えられるのだ！)。

自身のコピーを雛で形成することで、同時に 2 か所(以上)に姿を現すこともでき、アイホートの迷宮を通じて世界の各地へ移動できる為、時間差なしで海外の情報なども入手できるし、自身をコピーした雛を使えば、脱出のトリックなども簡単である。

5-3: 救迷白光教の教典

この経典は一般に流布している、布教用に救迷白光教が配布しているものだ。

信者、オカルティストの知り合いや、警察などの公安関係者等と接触した場合に特にロールの必要なく入手することが出来る。

わら半紙にガリ版刷りの粗末なもので、手書きの教義が謄写されている。

判読が難しい部分もあり、この経典を読むには 1 時間の時間と、<日本語>か<芸術：(印刷技術が関係あるもの)>のロールが必要となる。

ロールの成否に関わらず、この経典に救迷白光教の所在地、東京府荏原郡待瀬村が書かれていることが分かる。

成功した場合、この経典には常人には理解し難い語句が並んでおり、一見すると仏典の原典を無理矢理翻訳したような箇所や、漢音写したような箇所もある。

かろうじて理解できるのは、以下のような内容である。

- 救迷白光教の神は地下の迷宮のような場所に閉じ込められており、その雛たちが神の使いのようなものである。
- いつか神が信者の前に立つときが来る。このとき、従順に神に従うこと。
- 星の座が正しい位置に戻ったとき、白い神は地上を歩き、その為の下僕である信者たちが用意すべきこと。

穿った見方をすれば、単純に神の使い=教祖の蘆田晃白に従っていれば、神の御許へ導かれて、神の下僕の一員となり、奉仕しながら幸福に暮らすこと

ができる、というものだ。

プッシュロールで失敗した場合、教典を読みこんでいるうちにこの荒唐無稽な内容を信じ込んでしまい1/1D6の正気度を喪失するとともに、救迷白光教が正しいのだと誤認しはじめる。

探索者がすでに経験を積んでおり<クトゥルフ神話>のルールか、すでに『グラーキの黙示録』を読んでいる場合、この経典の内容が悪名高い『グラーキの黙示録』のIV巻の内容に近いことが分かる。

この経典を読んでも<クトゥルフ神話>が上昇することはなく、呪文の習得もできない。

『グラーキの黙示録』については、ルールブックのP.223、キーパーコンパニオンのP.15、及び6版ルールブックのP.108を参照(あるいはラムジー・キャンベルの作品群を)。

6:片山の自宅兼事務所

中桐の連絡先や、探索者と片山の関係からその自宅兼事務所へ連絡を取った場合、留守であると言われる。

探索者が片山と知り合いであるか、中桐の件などを持ち出した場合等、特にロールの必要なく彼女が大田、中桐から連絡を受けて出て行ったままであると教えられる。

ここで得られる情報は無いが、探索者がまだ牧野の治療院へ行っていない場合は、そちらに片山が居る可能性が高いことを教えるとよいだろう。

7:怪想社

中桐の勤め先の怪想社に連絡を入れた場合、こちらも同様に中桐は留守であると言われる。

中桐と知り合いであることや、彼の件を伝えれば怪想社の担当者が調査をしていた救迷白光教について教えてくれる(中桐は編集者であるとともに作家なので、社内に担当者が居るのだ)。

8:深川の事件

救迷白光教の聞き込み調査で得た深川における堀江某の事件を追った場合である。

8-1:深川、堀江某の事件

深川の事件を聞きこんだ探索者がこれを調査した場合、以下の情報が得られる。

資料に当たった場合は図書館、聞き込みを行った場合は態度によってコミュニケーション系の技能を適宜行うこと。

- 被害者の堀江の妻は内縁のようなもので、日常的に夫から虐待を受けていた形跡があった。
- 被害者は知人を通じて救迷白光教を知り、入信したようだ。最初は夫から逃げる為だったようだが、深く帰依して正式に出家しようとした。
- 出家の準備の為に家に戻ったところを夫に掴まり、監禁されて殺されたことになっている。
- 死体はひどい状態であり、外側以外、原形を留めていなかったとも言われている。無くなっていった内側については、夫が時間をかけて処理したのだろうと推測されている。
- 殺した方の夫も精神に異常を来しており、異常な殺し方もそのせいではないかと考えられている。
- 夫は最初殺していないと主張していたが、だんだんとおかしくなり、結局は治療の為に根岸病院に入院させられている。

8-2:根岸病院

根岸病院は東京市下谷区下根岸町にある(現代の東京都台東区根岸町の辺り)。当時は寺なども多く、東京市内ではあるものの郊外に隣接した閑静な街だった。

根岸病院に深川の事件の犯人と目される堀江を訪ねた場合、平日の午前9時から午後5時までの間ならば、面会の可能性がある。それ以外の時間帯は面会不可で、ロールのチャンスもない(面会が断られたら、探索者にそう告げる)。

探索者が医者であるならば堀江の診断書を閲覧することや、面会には特にロールは必要ない(<信用>が探索者作成時の医者の下限值より減少している場

合は別だ)。それ以外である場合は、<幸運>か<信用>、あるいは探索者が行うコミュニケーション系のロールが求められる。

ロールに成功した場合は病状がよく落ち着いている為、面会が可能となる。失敗した場合は患者の状態が悪いので後日にまた来てくれるようにと言われる。

探索者が診断書を確認した場合、複数の医者 of 所見が書かれているが、共通して『緊張症、わざとらしさが認められる』『部屋の隅などの場所に偏執的な恐怖が見られる』『幻覚、幻聴を伴う』『回復の見込みなし』となっている。

まともに話せる状態のときは一貫して殺人の疑惑を否定し、あんな殺し方をできるわけがないと供述している。

面会が可能になった場合、担当の医師からあまり刺激しないように釘を刺されるが、それ以上のことは言われず、立ち合いもしない(室外に看護師は待機している)。

堀江は症状が重い為、個室を与えられている。彼はあまり広くない部屋の真ん中にあるベッドの上に胡坐をかくように座っており、げっそりと痩せた不健康な顔で怯えた目を部屋の隅へ忙しく向けている。

病室に入ってきた探索者に怯えた目を向けて、特にその身体を中心の線に目を走らせるが、どこか演技の様なわざとらしさを感じる(すでに中桐の死に様を見ている探索者には、その意味が分かるだろう)。

聞かれたことについては素直に話す、彼は一貫して妻を殺したことは否定し、普通の人間にあんな殺し方は出来ないと繰り返す。

探索者が「蛆」に関する言葉を発すると、彼の不健康な顔がさらに青ざめて、部屋の四隅をすばやく見回す。

「蛆だ。白い蛆が」

「あそこを見てくれ、俺を監視しているんだ！」

興奮気味に彼は叫ぶと、何もない部屋の隅を指さして怯え始める。この異様な怯え方を見た探索者は、0/1の正気度を失う。

堀江が騒ぎ始めると部屋の外で待機していた看護師たちが殺到し、探索者は部屋の外へ追いやられる。当番の医師が駆け付け、堀江の様子を確認すると鎮静剤が打たれ、彼は恐怖に怯えながらベッドに横たわる。

医師は部屋の外で探索者達に「蛆」という単語を発したか、確認される。探索者がそうだと答えた場合、堀江はその蛆という言葉に反応して恐怖し、混乱が大きくなることを語り、蛆に監視されているというのは何かの妄想で、事件に関係があるかもしれないと感想を漏らす。

9: 巣鴨病院、蘆田麻里

巣鴨病院は東京府北豊島郡巣鴨町にある(現代の東京都豊島区巣鴨の辺り)。こちらは東京の市外、いわゆる郡部に当たる。今からは考えられないが風光明媚な、精神病患者の治療を行う閑静な土地柄だった(江戸期には「本郷もかねやすまでは江戸のうち」などと謳われていたように、本郷ぐらいまでなら江戸、巣鴨は江戸の外、田舎も田舎だった)。

探索者が入院している蘆田麻里を訪ねた場合、患者の照会に時間が掛かったうえ、そのような患者は居ないと言われる。

<言いくるめ>以外のコミュニケーション系の技能によるロールか、『蘆田麻里を名乗る患者』が居るか確認した場合、病院側は「蘆田麻里を名乗る患者は居る」と回答する。

探索者が午前9時から午後5時の間に訪ねているのであれば、面会は特に制限されない。根岸病院の堀江と異なり、身元が不確かな患者でしかないからだ。

探索者が医者であるならば、根岸病院同様に診断書を見ることもできる。

蘆田麻里の診断書も複数人の所見が書かれている。全員が『緊張症、無言症』『語彙の喪失』『回復の見込みなし』と記載しており、彼女が言葉を失っているか、言葉に反応しなくなっていることが書かれている。

それ以外には目立った記載はないが、入院の日付は待瀬村の資料にあった大正5年で一致することが

確認できる(怪我の治療後に巣鴨病院へ移動している為、時期は多少ずれている)。

蘆田麻里の病室は大部屋だが、昼間の時間帯は患者がある程度自由に歩いている為、彼女以外の姿は見えない。

ベッドに座って茫洋としている彼女は年齢よりも年老いて見えるうえに、髪が真っ白になっている。落ちくぼんだ目の周りには何の感情も読み取れない。

探索者が先に救迷白光教を見に行くなりして、光母と呼ばれる蘆田麻里のアイホートの後裔を目撃している場合、外見的な相似と、教団に居る彼女がひどく若く見えることに気が付く。

探索者が「蛆」という単語を話さない限り、彼女は全く反応せずそちらを向くことすらしない。その言葉を聞くと彼女はわずかに身体を震わせ、何の感情も無かった目に憎悪と恐怖が浮かんでいることが分かる。

探索者がさらに話しかけるか、反応を待つかした場合、蘆田麻里は怒りを帯びた荒い息とともに罵り始め、狂ったように笑い始める。

「あいつを殺さなくては！ 晃の為にも。」

あの血は蛆のものよ！ 蛆のものなのよ！」
<心理学>か、<精神分析>のロールに成功した場合、さらに彼女は叫び続ける。

「大きくて、真っ白で、じつりと冷たくて。奴は何も残さなかった。」

晃！ わたしの可愛い息子！ 晃を助けなければ！」

彼女は感情の抑制を失い、すすり泣き始める。騒ぎを聞きつけた看護師が鎮静剤を打って大人しくさせている間に、蘆田麻里の状態を確認していた担当の医師が叫ぶ。

「カタルシスを起こしている。回復の見込みはなかったのに。奇跡だ！」

この蘆田麻里の回復は、ささやかながら探索者達に喜びと自信を与える。シナリオ終了時(探索者達が生きていれば)、正気度の報酬に+1点を得ることが出来る。

この後、蘆田麻里から有用な情報を引き出すことはできない。回復の兆しを見ただけで、彼女は今後も長い治療が必要なのだ。また、時間をおいて再

度訪問しようとした場合、回復の為の治療と無用な刺激を与えない為には面会は拒否されるようになる。

10:待瀬村

待瀬村は架空の村だ。位置的には東京都荏原郡のはずれの辺りを想定している(現在の東京都品川区、目黒区の端の辺り)。品川の海岸に近い街道筋や、鉄道が敷かれた大崎、目黒の辺りは工場なども多く、労働者が多かった。しかし、現在の山の手と言われる地域はあまり開発が進んでおらず、麻布ですら高台の緑の多い閑静な土地で、陸軍の駐屯地が置かれていた。郊外への進出が盛んになる震災前後から大いに発展する。

10-1:待瀬村の白い家

最寄りの駅(大崎や、目黒辺り)から救迷白光教の本部があると言う住所に向けて自然の多く残る山の手の長閑な風景の中に、忽然と『白い家』が現れる。

過去において、名主であった平取家の跡地に建てられた屋敷で、通称平取屋敷だが、現在は救迷白光教の本部施設となっており、純然たる和風建築が何故か真っ白に塗られている。

異様と言えば異様な光景ではあるが、正気度を喪失するほどではない。

『白い家』の周りに限ったことではないが、家同士の間隔がかなり広く、視界の範囲にまばらに家屋の屋根が見える程度である。

探索者が待瀬村で救迷白光教の本部以外での聞き込みを行う為には、村人を探す必要がある。

10-2:平取家の伝承

江戸期にあった平取家について、人々の記憶にはあまり残っていない。明治になってから引っ越してきた村人も多くなっており、平取の名前を知らないこともある。

<幸運>によって平取の家を記憶している村人と遭遇するが、彼らですら伝聞形式で伝説を聞かされているようなものだ。

これらの情報を得るのに特にロールの必要はないが、探索者から話しかけること。

- 代々、平取の家はおかしな奴が多かったと言われている。名主の立場を利用して村人に無理難題を吹っ掛けるのも珍しくないし、裏では人買いをしていたとも言われている。
- 井戸に村人や旅人、買って来たかかどわかしてきた人を投げ込んでいたらしいが、何故そんなことをするのかは分からない。
- 明治になったばかりの頃に、平取の家の者が村の娘をかどわかすという事件が起こり、それまでの不穏と不満が爆発して、平取の家を村人たちが襲った。
- 平取の屋敷はその時に半分破壊されており、今の建物は明治半ばになってその廃屋を買い取った戸川によって再建されたものを元に、蘆田が増改築を行っている。
- 怪談にもなった井戸は今も残っており、平取の家だったころは野外にあったはずだが、救迷白光教の屋敷になってからはその中のどこかにあるのではないか。

10-3:戸川家の噂

探索者達が明治期中期にあった戸川家の事件について尋ねた場合、すでに30年近く前のことである為、村人もほとんど記憶していない。

戸川家の知り合いを探し出すか、<幸運>によって事件を記憶している人物と遭遇する。

世間話の類である為、特にロールの必要はない。彼は戸川の妻の無実を確信しており、以下のように語る。

「何があったかなんて分からないんだよ。誰も何も知らない。見てないからね。」

戸川のところのお嬢さんは親切だったし、一人息子を可愛がっていた。とても殺すだなんて思えない。

警察が逮捕したけれど証拠も何もなく、よく調べられる前にあの娘も死んでしまった」

「そういえば、戸川のお嬢さんは『井戸に！井戸に！』と言っていた。井戸に何かあるのか」

10-4:蘆田家の話

蘆田家の話題を出すと、村人たちは声を潜める。

蘆田家の話を聞き出すには、探索者の手段に合わせてコミュニケーション系の技能ロールを行わせる。

成功した場合、村人は以下のように語る。

「村に引っ越してきたばかりのときは、ごく普通の家族であり田舎に落ちのびてきた感じだったが、しばらくすると祖父の旭夫と父の次郎がおかしくなったように見えた」

「井戸に人を投げ入れているという噂がまた立ち始めたが、その頃には何故か蘆田家は成金のようになっており、村の有力者になっていた」

「蘆田の次郎が妻と子供を井戸に投げ落とす事件が起こったときは、まるで平取の家の者の再来だという村人も居たが、彼らもいつの間にか入信しており口をつぐんでいる」

「あの事件の後、蘆田麻里は巣鴨病院に入っていたようだが、今は戻ってきており教団の『光母』などと呼ばれる立場であるらしい」

「そういえば、最近蘆田旭夫と次郎の姿を見ていない。まあ、信者の恰好があれなので区別が付かないだけかもしれないが」

11:救迷白光教

大田はそこが迷宮のように大きいと語るが、田舎の屋敷としては建て増しした分を除けば普通に思われる(名主の屋敷として、かなり立派なものだが)。

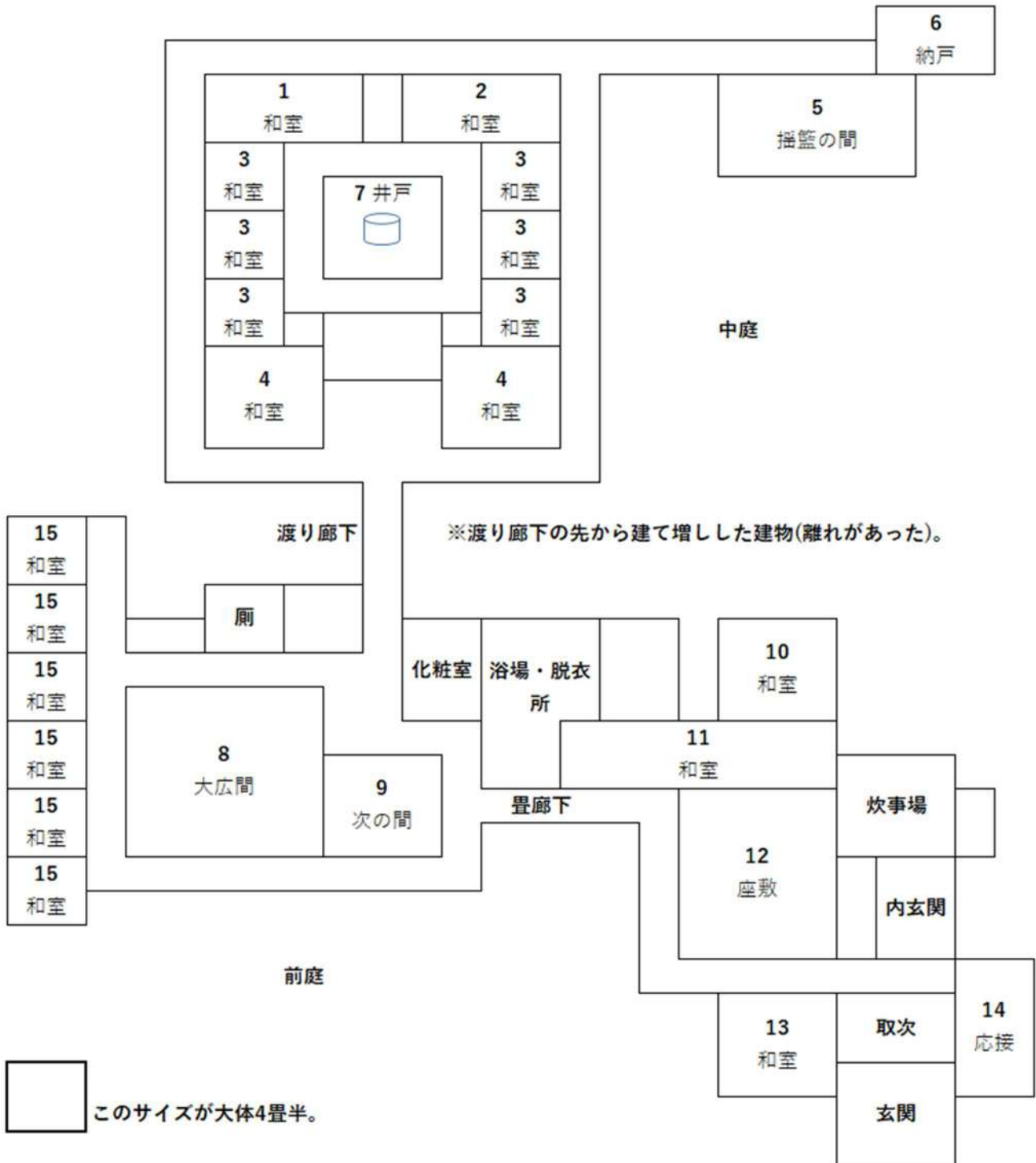
何故か全体が白く塗り込められているが、昔からあったものを修復して、おそらく元の平取の屋敷だったと思しき表玄関のある前半分の建物に、後ろ半分建物が継ぎ足すように増築されている。

前後の建物とも純和風であり、隙間が多い建物である。生け垣などの建物を隠すものもない為、<隠密>などで隠れて近寄るには不向きである。

ほぼ全面が障子か雨戸である為、侵入は容易だが信者に気付かれないのは難しい。

この建物の迷宮部を含む内部に居るとき、視界の端に常に何か白いものが居る気がする。それは綿埃か何かのように思えるのだが、そちらに視界を向

■ 救迷白光教 本部施設



けるとそこには何もなく、むしろ清掃の行き届いた部屋の隅であったり、廊下の端であったりする。

探索者達を不安にさせるように、以下のようにロールに成功することで演出する。特に正気度の喪失は無いが、この白い家が不穏であることを伝える。

➤ <医学>

単純に視覚に異常はない。つまり、本当に視界の端にうごめく何かが居る。

➤ <聞き耳>

何か小さな生き物、昆虫のようなものがうごめく音がする。

➤ <隠密>

こういった日本家屋には隙間が多く、隠したり隠れたりするのは容易である。

➤ <目星>

視界の端ではなく、視界の正面に白い蛆、蜘蛛、ホコリタケのようなものを捉えるが、そいつはすぐに部屋や家具などの隙間に消えていく。

➤ <科学：生物学>

白い何かが未知の種で可能性があることに気が付く。

➤ <クトゥルフ神話>

詳細は分からないが何らかの神話に関連していることは確かである。

ホコリタケ：丸い形状で茎の部分が太いキノコの一つ。世界の各地で見られ、地上に群生する。主に白く、成熟すると茶色になり、頭頂部に穴がいて胞子を放出する。食用になるが、主に成熟前のものを食す。

1. 蘆田晃白の私室
和室の中には何もない。蘆田晃白は迷宮に戻って休息をとる為、この部屋はダミーである。
2. 蘆田旭夫、次郎、麻里の私室
晃白の私室と同様に何もない。やはりダミーである。
3. 教団幹部の私室
幹部クラスになると個室が与えられる。アイホートの後裔と置き換わっていない場合は、この部屋に私物などある程度の生活用品などがある。
4. 幹部用の共同スペース
本来は食事や会議などを行う為の部屋だが、全く使われていない。一般信者が許可を得て入れるのはここまでである。
5. 揺籃の間
アイホートの雛を受け入れて迷宮から帰ってきた信者が、雛が孵るまで待機する場所である。
6. 納戸
主に掃除用具が入っているが、雛が孵った後の信者の死体(と呼べるものか分からないが)が無造作に置かれている。
7. 井戸
平取家の裏にあった井戸は今、建物の中央部にある。この井戸を囲む部屋に入ると『迷宮を形

成する』の効果範囲に入る為、自動的に迷宮へ迷い込む。

8. 大広間
蘆田晃白が一般信者、外来の者を相手にする場合はこの広間を使う。主に説法や、集会に使われる部屋である。
9. 次の間
大広間の準備室。
10. 一般信者の部屋
入信して少し経つと移る部屋。こちらも仕切り等はないが、座敷から離れている分生活の喧騒からは逃れられている。
11. 一般信者の部屋
入信したばかりの信者が使う部屋。広い部屋で特に仕切りなどもない。
12. 座敷
一般信者が共同生活に使うスペースで、昔ながらの囲炉裏もある。
13. 一般信者の部屋
訪問者の対応を行う役割を持つ信者の部屋。入信してそこそこ長い者が担当する。
14. 外来者の対応を行う応接間。施設内で唯一の洋室である。主にマスコミ関係の奥まで通さない人間か、初めての訪問者を相手にする。
15. 一般信者の部屋
後からつけ加えるように建て増しされた長屋のような、部屋が連なった建物。1室が大体4畳半で2~3人の信者が共同で使う。

11-1:教団を訪ねる

探索者が教団の様子見や、牧野を探りに直接訪ねた場合、全身を覆う白いローブの様な服を着た、顔もよく見えない信者が対応に出てくる。

入信希望ではない探索者に対して彼らは「見学は行っていない」とか、「牧野は修行中なので、面会には応じられない」と応える。

入信希望である場合、玄関の脇の部屋に通されて待つように言われる。

救迷白光教を訪ねた探索者が玄関先で時間を取った場合、その対応に合わせてコミュニケーション系のロールを行う。ハード以上で成功した場合は、表

情は見えないが彼らが困っている様子を見せ、上層部に報告しようかと相談を始める。

探索者達が強いてプッシュロールを行って失敗した場合、その探索者は教団に出禁になり、姿を見せただけで追い払われるようになる。

ロールの成否に関わらず、入信希望を装った場合でも、奥の方から同じ白い服だが、おそらく上等なものに身を包んだ輝く姿が現れる。

建物の奥へと続く暗い廊下から、白く輝く人影が滲み出るように現れた。

そいつは絹のような上等な白い服で全身を覆っている為に、輝いて見えるように思えた。だが、廊下には障子を通した弱い光しかない。薄暗い廊下なのにも関わらず、そいつ自身が淡く輝いていた。

感動的な、宗教的な印象を与える場面と言えたが、探索者達を感じたのは生理的な嫌悪に近い不快感だった。

そいつはそんな印象を全く無視した無邪気な、子供特有の甲高い声で笑いながら信者からの報告を聞き、探索者達を見た。

探索者達はこれが救迷白光教の教祖、蘆田晃白だと直感する。その異様な印象から、0/1の正気度を喪失する。

蘆田晃白の年齢を考えると成長が止まっているように思えるほど、彼は子供に見える。これに気が付いた探索者は追加で1点の正気度を喪失する。

蘆田晃白は値踏みをするように探索者を観察した後、見学や、牧野との面会等、肯定的な返事をして本部内へ探索者を導き入れる。

11-2:牧野との面会

探索者が救迷白光教の本部へ入り込み、牧野との面会を希望した場合、呼ばれて奥から出てくる(潜入などの手段を用いて、牧野と遭遇した場合でも同様である)。

牧野は他の信者と同じく白い頭巾の付いたローブのようなものを着ており、その顔は判然としないが、ひどく顔色が悪い、紙のように青白い顔をしていることが分かる。

彼は探索者に、今の自分は救迷白光教に帰依していると語る。探索者の質問には大体答えるが、それは全て救迷白光教への称賛や信頼となり、探索者達も一緒に帰依しようと答える為、牧野から教団の情報を得ることはできないし、牧野を連れ出そうとすることもできない。

もしも、探索者が牧野のローブのようなものを引きはがそうとしたり、顔を見せろと迫った場合は、素直に顔を見せる。

その顔は牧野に違いなく、蒼白な肌に頭髪を含めて毛が一本も無い容貌である(異様ではあるが、正気度の喪失は無い)。

キーパーへ：このアイホートの後裔は本物の牧野の死体から記憶を受け継いでおり、牧野が持っている情報は全て知っている為、探索者が会話や、<心理学>などでこの牧野が偽物であることに気付くことは無い(が、外見から偽物であることはバレバレである)。

11-3:普通の信者

救迷白光教に入信したばかりの信者は、白いローブのような衣を纏ってはいない(普通の人間だからだ)。

彼らは瞑想や断食、時には違法な薬物等を使って修行している。教団の思想が浸透し、アイホートの提案に応じる可能性が高くなると、正式な入信の儀式として、神の待つ迷宮へ送り込まれる。

探索者達が信者に話しかけると気楽に応じてくるが、教団内部の事を探ろうとすると不審に思われる。

一般の信者が持っている情報は探索者達と大差ないが、施設内部について尋ねた場合は以下のように語る。

- 我々のような信者は、玄関のある建物で寝泊まりして、修行を行う。
- 一番広い部屋は、晃白様が説法などをする際に使うほか、修行の場でもある。
- 白衣を与えられた正式な信者の方々は、奥の方にある建物で寝泊まりをしている。
- 揺籃の間という、正式な信者だけが入れる個別の修業場がある。そこから出てくると、一人前の信者ということになる。

- 建物の中心部に正式な信者になるための試練の間があると言われている。正式な信者になるとこれを明かすことはできないので、詳細は分からない。

11-4:白い信者達

救迷白光教の正式な信者は、ローブのような白い衣で全身を覆っている。

白い信者達は積極的に探索者を避ける。無理矢理、探索者が白い信者を捕まえようとした場合、不自然でない白い信者が止めに入り、警告を与える。

監視が緩い状況を作り出して、不自然な白い信者を捕まえた場合、不自然とは言えコミュニケーションが全く取れない訳ではない為、最低限の受け答えは行うが、何らかの情報を得ることは出来ない。

彼らの白衣を引きはがしても白い顔と体毛が一切ないことが確認できる。異相ではあるが正気度を喪失するほどではない(まだ普通の範疇なのだ)。これについても、修行の一環であるなどの言い訳をする。

信者達は一定の修業期間の後、秘儀参入としてアイホートの迷宮へ送り込まれる。

アイホートの雛を受け入れた信者は雛が孵るまで施設の奥で暮らした後、拒否した信者は神に圧殺された後、アイホートの後裔として再生される。

再生したばかりの信者達は、身体のコントロールや、記憶、立ち居振る舞いに問題がある為、一定期間、信者として施設内で暮らす。

死者から移植した記憶が定着し、立ち居振る舞いに違和感が無くなると、一旦、家族などの身元引受先へと戻され、再度、今度は永久に出家するとして、教団に戻ってくる。

その後、信者が教団にとって利用価値が無い場合は迷宮に戻り解体される。そうでない場合は、白い衣をまとってその不自然な肌の白さや、体毛が一切無いことをごまかしながら人間の生活を模倣する。

11-5:光母、蘆田麻里

蘆田麻里は教団内で『光母さま』と呼ばれており、最高幹部の一人である。

他の信者同様、白い衣に全身を包んでおり、唯一露出している顔も真っ白に近い。

巣鴨病院で蘆田麻里に面会している場合、彼女が病んでおらず、若かったならばこのような顔をしているであろうと印象を受ける。

探索者が同一人物ではと疑ってよく観察した場合、ロールの必要はなく巣鴨病院で面会した女性と他人の空似とは言えないほどよく似ていることが分かる。作り物めいた質感の白い肌に、瞬きをする回数が極端に少ないこと、そして露出している部分に毛が生えていないことに気が付く(が、まだ普通の範囲内なので正気度の喪失は無い)。

基本的に蘆田麻里は探索者には近寄らないか、他の信者が近寄せない為、見る以外のことは無い。

一般の信者に対して、蘆田麻里のことを聞いた場合は、以下のように語る。

- 晃白様の生母様だ。井戸に落ちた晃白様を救ったのが光母様なのだ。
- 晃白様を産んだだけでなく、晃白様を目覚めさせたもの光母様なのだ。
- 教団では内部を取り仕切っておられるが、実際には我々とは接点がない。

11-6:揺籃の間

アイホートの雛を受け入れた信者が、それが孵るのを待つ部屋である。

周りに比べても壁は厚く防音措置が施されており、中を小さく区切って個室のようになっており、それぞれのスペースは薄い白い布が扉替わりに掛けられている。

部屋の中は青い霧のようなものが漂っており、これを吸い込んで CON のハードのロールに失敗すると気分が落ち着き、正気度が1点回復する。

個室の中には目を虚ろにした信者が、どこか幸せそうな表情しながら床に大の字になったり、丸まったり、あるいは部屋の隅を怯えて見回し続けたりしている。

探索者が声を掛けるなどして、刺激を与えると無反応だった信者が動き出す。

— . — . — . — . — . — . — . — . — . — . — . — . — . — . —

部屋の中に居た信者が探索者達に気が付くと、何かを言おうと口を開いた瞬間、その眼がぐると白目をむく。

形容しがたい呻くような悲鳴を上げながら後ろへと倒れこむ信者の額から鼻、口と身体の中心に沿って裂け目が広がっていく。それは、日比谷公園で見た中桐と同じ様相だった。

そして、その身体のそこかしこに小さな穴が開き、そこから白いものが流れるように溢れ出し、対照的にその身体は空気が抜けていく風船のように萎んでいくのも同じだった。

この異様な死に様と、教団施設内で視界の隅を蠢く白い塊が何であるかを認識した探索者は、1D3/2D6 の正気度を喪失する。

信者の身体から溢れた蒼白いもの(アイホートの雛)は、闇に紛れるか、部屋の片隅へと消えていく。

この死体、残された外皮だけに近い物体を調べた場合、中桐と同じように 1Cm 程度の穴が無数に開いている。

<医学>のロールを行った場合も同様である。中桐と同じ症状であることがはっきりと分かる。

キーパーの判断により、この場所にまともな会話が可能な信者が居ることにもよい。その場合は、救迷白光教の秘儀参入の秘密や、蘆田晃白について語らせ、その直後に迷宮へ送り込まれるようにするとよいだろう。

11-7:蘆田晃白の私室

蘆田晃白をはじめとした白い信者達は、施設の奥の方に私室があることになっている。

実際は彼らに私室は必要なく、迷宮部に戻ることで姿を隠して、雛の塊からばらばらになってメンテナンスされたり、元となった死体の場所に戻って再比較されたりする。

蘆田晃白の私室とされる部屋はダミーで、空っぽだが、キーパーの判断で迷宮のヒントとなるようなものを探索者に与えてもよい。

探索者達が彼らの後を付けるなりして施設の奥に踏み入った場合は、迷宮部に踏み入ることになる。

シナリオの早い段階であった場合は、晃白などに気付かせて引き返させるようにするとよいだろう。

11-8:迷宮と井戸

施設の後ろ側の建物の中心部には、井戸がある。

この井戸がある場所には、『迷宮を形成する』の依代となっている救迷白光教の紋章も存在している。

井戸には線で模様が書かれており、<クトゥルフ神話>に成功すればそれが『門』の呪文に関わるものだと分かる。

この井戸は『門』を通じてアイホートの迷宮に通じている。かつては井戸に投げ込まれることでアイホートと遭遇する可能性があったが、今は蘆田晃白が『迷宮を形成する』によって作成した教団施設の迷宮がその役割を果たすようになっている。

この『門』の紋様を消すことで、その効果は解除される。だが、蘆田晃白が生きている場合、すぐにも再度『門』を作る可能性が高いうえに、『迷宮を形成する』の効果があるうちは、この井戸が通じていなくともアイホートは施設の迷宮に顕現可能である。

キーパーへ：探索者達が『門』を発見することで、これを破壊すれば解決すると誤認する可能性がある。『門』だけを破壊した場合は、以下の問題点があることを指摘すること。

- 蘆田晃白が生きている場合、再度『門』を使用する。
- この井戸は『門』であり、『迷宮』は関係がない。

11-9:秘儀参入

救迷白光教に信者として潜入している場合、入信してから数日後に蘆田晃白が探索者の前に現れる。

入信して間もない探索者達が、正式な信者となる為の試練を受けることに周りの同じような信者達はどよめくが、すぐに祝福に変わる。

晃白は無言を言わせない調子で探索者達を施設の迷宮部へと連れていく。拒否することは出来ない雰囲気だが、そうした場合はその晩に強制的に放り込まれることになる。

<医学>、<自然>か、<生物学>に成功した場合、牧野が死亡したと思われる日から考えても、完全に白骨化しているのはおかしいと分かる。

骨をよく調べた場合、折れている以外にも細かい傷が無数についていることに気が付く。

特に得られる手掛かりは無いが、牧野の死亡が確実であること(教団内にいる牧野は偽物)が分かる。探索者が彼の死体から何か遺品を探した場合は、踏み潰された際に折れてしまっているが、愛用の煙草入れが懐から見つかる(舶来の高級品であるが、日本の煙草のサイズと合わないことを彼は嘆いていた)。

12-4:迷宮で起こる出来事

探索者が迷宮を移動中、「何もない」ということが続くことを避けたい(同様に常に何かある、というのでもなく緩急を付けたい)。キーパーの判断で、次の出来事をランダムで、あるいは任意で実施する。

キーパーはこの他には適宜イベントを追加するとよいだろう。

蘆田旭夫、次郎の白骨死体を発見する

蘆田晃白の祖父旭夫と、父次郎は晃白によって殺害されている。

迷宮内にあるのは古い白骨死体だが、これもアイホートの雛に齧られた為で、表面に細かい傷が残っている。

<医学>と<アイデア>で、服装や年恰好などからいって行方不明になっている蘆田旭夫と次郎ではないかと思に至る(確証はないが)。

<医学>でハードの成功した場合、この2体は迷宮内に残されている死体の多くの死因である何か巨大なものに押しつぶされているものと異なり、通常の手段によって殺害されていることが分かる。

キーパーは探索者が平取屋敷の跡で古文書を発見していない場合、蘆田旭夫の死体がこれを持っていることにしてもよい。

その他の信者の白骨死体を発見する

深川の事件の被害者堀江某の妻や、施設内で見かけた白い信者など迷宮には多数の死者が眠っている。

古いものから新しいものまでであるが、死体はアイホートの雛の餌になる為、きれいに白骨化しており、その表面に細かいかじった傷跡が残っている。

衣服の類も残っている為、そこから犠牲者の判別する手掛かりが得られる可能性がある。キーパーは適宜手がかりを提示して、誰の死体であるかを推測させるとよいだろう。

探索者は死体を発見した場合、0/1D3の正気度を喪失するが迷宮内では死体を見ることでは累積で3点以上は失われない。

アイホートの雛が這いあがってくる

アイホートの雛が小さい場合には、それに知性は無い。昆虫と同じような行動をする為、何かの拍子に探索者の身体を這い上がったり、その服のどこかに潜んでいたりする。

<幸運>が最も小さな探索者が最初に、それ以降はランダムに雛がその身体に張り付いていることに気が付いて、0/1の正気度を喪失する(探索者が関連する恐怖症を持っている場合、減少を大きくしてもよい)。

12-5:迷宮を脱出する

迷宮から脱出するには蘆田晃白とPOWの対抗ルールを3回連続で勝利する必要がある。ハードの場合は2回分、イクストリームの場合は3回分の成功と見なす。

成功した場合、襖を開けると忽然と入った場所と同じ部屋に戻っていることに気が付く。

戻った場所には誰も居ない(出迎えは必要ないのだ)。探索者達の脱出を妨げるものは何もないので、その気になれば即座に教団施設を抜け出して帝都へ戻ることが出来るが、その時点で探索は終了する。

13: 『奥の間』、井戸

移動の POW 対抗ロールにファンブルを起こした場合か、ロールを3回続けて失敗した場合、探索者自身が『奥の間』『井戸』へと向かう、蘆田晃白を探すと決めた場合は、ここに到達する。

現在は救迷白光教の建物の内部にあるが、過去は平取の屋敷の裏にあった井戸である。

— —

そこには何故か畳の上に井戸があった。

直径が3mほどもある巨大な井戸が突然、畳張りの部屋の真ん中に出現しているのだ。

石を積み上げて作られた井戸の囲いには、奇妙な線の模様が刻まれていた。どことなく縄文土器のそれに似ていたが、より古い時代の原始的な祭祀を思わせた。

ひどくおかしな、滑稽とも言える光景ではあったが、その井戸から吹き上がる冷気と何かしらの気配が、どこか神々しく神聖な雰囲気醸し出していた。

これが『奥の間』だと探索者が認識すると、その井戸の向こう側に掲げられた例の蜘蛛と迷宮の救迷白光教の紋章の下に、蘆田晃白が居ることに気が付く。

— —

井戸の向こう側で蘆田晃白が微笑む。

「ああ、思ったよりも早かったね。

神は、ふふ、井戸を上がっている最中だよ。貴方達を見定める為に」

6ラウンドか、キーパーの任意のラウンドの経過後、井戸よりアイホートが出現する。

ここでどう対応するかは探索者次第だが、主な選択肢は次の通り(いくつかの組み合わせになることもある)。

13-1: 蘆田晃白を攻撃する

蘆田晃白が人間ではないことは明白である。攻撃することを躊躇う理由はない。

探索者が攻撃を仕掛ければ彼は応戦する。通常の戦闘の処理を行う。

蘆田晃白は耐久力が0になる前に、井戸に飛び込んで逃げようとする。

井戸はアイホートが上がって来ているが、飛び込んで逃げた彼が神と衝突することは無い。

逃げられる前に耐久力を0以下にした場合、次項の『雛を取り除く』が成功したのと同じように彼は崩壊する。探索者はその有様を見て1/1D8の正気度を喪失する。

蘆田晃白を倒しても、アイホートが井戸から上がってくるのは止まらない。これを止めるには救迷白光教の紋章を破壊する必要がある。

13-2: 『雛を取り除く』を蘆田晃白に試す

蘆田晃白が雛を植え付けられたのは何年も前であるが、彼は普通のアイホートの後裔と異なり、その身体の雛がある程度の大きさに成長すると離れていき、新たな雛と入れ替わる。この為、呪文の抵抗に使用する値は15とする(つまり、7版準拠で75の技能値となる)。

探索者が呪文に投入したMP×5を技能値とした対抗ロールを行う。探索者が勝利した場合(引き分けの場合は、技能値が高い方が勝利する)、呪文は通常通りに効果を発揮する。

— —

蘆田晃白は何が起こっているか分からないようだった。その顔に、驚愕と恐怖の表情が浮かぶ。

「…そんな馬鹿な…」

言いながら彼の顔が崩れ始めた。例の白い蛆、蜘蛛のような塊がその身体から流れるように剥離を始め、次第に人型を留めることも難しくなる。

わずかな時間で蘆田晃白は、無数の白いものの塊が蠢く小さな山と、おそらく彼自身の元の肉体であったであろう四肢の一部や、半分以下になっている頭部の残骸が残るだけになっていた。

彼の身体と思しきものからは、一滴の血も流れていなかった。

— —

蘆田晃白の分解を目撃した探索者達は、1/1D8の正気度を喪失する。

14:結末

結末は探索者の行動によって異なる。

次にあげるものが主なものとなるが、シナリオの経過や探索者の傾向、キーパーの好みなどに合わせて結末を演出しよう。

14-1:浄化される場所

探索者が蘆田晃白を倒し、迷宮と井戸を破壊して完全にアイホートを追放した場合、教祖を失った救迷白光教は事実上解散する。

探索者はしばらくの間は生き残った幹部、アイホートの後裔を追い抹殺する任務に追われることになるが、アイホートとその使徒の蘆田晃白を失った彼らは組織だった抵抗もなく、順調に狩られる。

大田が生き残っている場合、体調を回復させた彼がその作業を手伝ってくれる(牧野と中桐の仇だとは言わずに、淡々と狩りを進める)。

探索者達の手によって蒼白の神の脅威は去り、汚れた場所だった待瀬村の井戸は浄化されたのだ。

キーパーへ：アイホートは待瀬村に出現しなくなったただけだ。かの神はブリチェスターの地下にある迷宮に留まって次の機会を窺っているが、迷宮に直接つながる場所がない為に、その機会はなかなか訪れないだろう。

このことは探索者も気付いているかもしれないが、神格を簡単に駆逐することなどできないのだ。

14-2:不浄なる場所は滅びず

短絡的に探索者達が救迷白光教の施設を焼き討ちにするなどした場合、施設は普通の木造建築である為、よく燃える。

焼け跡からは蘆田晃白やその他の信者達の死体は見つからず、逃げ遅れた正式な入信前の信者しか発見できない。

救迷白光教の勢力が司直の手にまで及んでいることもあるが、蘆田晃白の明晰な記憶による証言で、探索者達はこの焼き討ちの犯人として指名手配犯となる。

この事件は新興宗教、類似宗教に対する微妙な世情をくすぐることになり、ちょっとした論争を巻き起こす。

そして、新聞の上に勢力を再び伸ばした救迷白光教と、変わらずに生きる蘆田晃白を発見することになり、彼が新たな場所に施設を建造したことを知る。

不浄な場所は、ただ場所を移しただけなのだ。

14-3:あなたの隣の白い人

探索者が逃げ出すか、事件に関わらなかった場合等、救迷白光教はさらにその勢力を伸ばす。

気が付くと帝都で救迷白光教の名前を見かけたり、白い衣を着た信者を見かけるようになり、そればかりか探索者の隣人が真っ白な肌を持っていたりするようになる。

14-4:大田のその後

探索の開始(中桐の死)から、6日以上が経過している場合、大田の内部はすでに食い荒らされており、雛が孵ることで死亡する。

5日以内に『雛を取り除く』が試された場合は、かろうじて残った耐久力で彼は死亡を免れる(死ぬ寸前ではあるが)。

(大田の耐久力は16、中桐の耐久力は11で、中桐が死亡した時点での大田の耐久力は残り5となり、1日に1点減少する)

雛が駆逐されることで悪夢からも解放されるが、今度は仲間を失った罪悪感に苛まれることになる。彼のその後は探索者達の対応にもよるが、持ち前のタフさでこれを克服して、探索者としてさらに成長する。

15:正気度の報酬

探索者によって結末は異なるが、蘆田晃白を駆逐し、迷宮を破壊し、井戸を埋めた場合は、完全に救迷白光教の陰謀を阻止したことになる。この場合、1D10点の正気度を獲得する。

性急な探索者が救迷白光教を焼き討ちした場合、1D3点の正気度を獲得するが陰謀の場所が移っただけであることがすぐに発覚する。

探索者が逃げ出した場合、白い人々に侵蝕される日常を味わう為に、1D6点の正気度を喪失する。

大田が生き延びていた場合、追加で 1D3 点の正気度を獲得する。

探索者が牧野の遺品を大田か片山に手渡している場合、追加で 1 点の正気度を獲得する。

蘆田麻里を刺激して回復のきっかけを与えた場合、追加で 1 点の正気度を獲得する。

参考資料、その他

本シナリオで主に参照した資料等を記載する。

- Cold Print HeadlineBookPublishing、Ramsey Campbell
『Before the Storm』
- THE GREAT OLD ONES Chaosium
『The Pale God』、Kevin A. Ross
- Made In GoatsWood ChaosiumFiction
『CROSS MY HEART, HOPE TO DIE』、J. Todd Kingrae
※同名のシナリオが Ramsey Campbell's GoatsWood に存在。作者も同じ J. Todd Kingrae。

- 新クトゥルフ神話 TRPG 株式会社 KADOKAWA
- クトゥルフ神話 TRPG 株式会社 KADOKAWA
- クトゥルフ神話 TRPG クトゥルフと帝国 株式会社 KADOKAWA
- 疫病と狐憑き 近世庶民の医療事情 みすず書房、昼田源四郎
- 明治大正東京散歩 人文社
- 和の背景カタログ マール社

- 『大正略字』フォント
表紙に使用している『大正略字』フォントは以下の URL よりダウンロード可能。
<https://booth.pm/ja/items/363104> ※フリーなのでぜひ、ご活用を！

- 帝都モノガタリ
<http://fgate.cyber-ninja.jp/index.html>

あとがき

かなり前に『蒼白神拳 お前はもう死んでいる』という仮称で作成されていたシナリオで、今回公開用に全編リメイクしたら別のシナリオになった、というよくある奴です。

シナリオ中に NPC が「ひでぶ！」と吹っ飛ぶ内容ですが、そこらへんは KP 諸氏でよく調整してください(今はもう北斗の拳的な爆裂死亡は分からない気もしていますが)。

リメイクに至った理由として、ラムジー・キャンベル先生の『Cold Print』の翻訳がクラウドファンディングで決定したことがあります。

プロの翻訳に加えて森瀬繚先生の解説が付いてキャンベル作品が読めるのはとてもうれしいことです。

奥付

発行日：初版 令和 3 年 7 月 17 日

発行：F.G./龍門亭 EDO-RAM(@EDO_RAMv200)